

## 西村晃とゆくポルトガル・スペインの旅 記録

2018年8月25日~9月2日

### ★旅の目的

- ①老大国ポルトガル・スペインは、いま観光と農業を基盤に、安定した国づくりを行っています。  
そのポイントを歴史をふまえて考察します。
- ②「食の都」を訪ね、グルメ大国の根幹に迫ります。
- ③ワイン作りや魚介類など農水産物という一次産業がいかに重要な国の資源か、再確認します。
- ④海洋大国として発展した歴史と文化、遺産について学びます。
- ⑤両国の文化・歴史をふまえて、東京五輪後の日本の進むべき進路を学びます。

## ★第1日 8月25日(土)

クラブツーリズムのチャーター便を使ったポルトガル・スペインを巡るツアーには18名が参加、クラブツーリズム霜田正明取締役、小川順子ツアーディレクターが同行した。

7時半 成田空港集合

9時半発 全日空1169便 ボーイング787型

ポルトガル ポルトへの直行便 乗換なし 途中給油なしでイベリア半島まで直行する チャーター便

ロシア上空8時間飛びその後 ヨーロッパ8か国を経てポルトガルへ13時間あまり

ポルトガルがエンリケ航海王子のもと海洋へ本格的に乗り出したのが1415年、南アフリカ最南端喜望峰にたどり着くまでに70年かかっている。そのあと種子島に漂着するまで60年、つまり日本に来るのに130年かかったわけだ。

それを考えると遠いポルトガルまで13時間で着くのだからやはりすごいことだ。

130年と13時間、

その時空を超えた旅が始まる。

787型機はボーイング社自慢の後続距離が長い経済性に優れた飛行機だった。

日本にいとあまり気が付かないが、外国人観光ブームは日本だけでなく世界的な傾向だ。

いまは第二次海外旅行ブームある。

第一次はジャンボジェットが就航した1970年代海外旅行料金が大量輸送により大幅に値下がりした時だ。

そして今はLCCの普及により発展途上国の人でも海外旅行に手が届くようになった。

今後大旅行時代はますます活況になると予測される。

世界の二大航空機メーカーでは戦略が二つに分かれた。ヨーロッパのエアバス社はジャンボを上回る二階建て大型飛行機A380の需要が増えると予想した。それに対してアメリカのボーイング社は中型機の需要が列車やバスからシフトするとよみ、経済性に優れた787型の開発に力を入れた。

この戦略を全面的に支持したのが日本の全日空だった。

世界でいち早く大量発注を行い、ボーイングの販売戦略に全面的に協力したの

だ。ところが、就航早々にエンジントラブルが発生、エンジン改善を国土交通省から命じられ、一時運行停止命令を受けた。その後改善策を講じて国際線国内線で活躍を始めていたが、今年春以降ロールスロイス社製のエンジン部品の摩耗が激しく部品交換のため順次欠航を余儀なくされている。

しかしながら全日空の意見を大幅に取り入れ、旅客機で初めて温水洗浄便座を導入するなどアメニティに対する評価は高い。

ポルト着

通関に長蛇の列、人口40万足らずの小さな都市の空港で大きな飛行機が来ることが想定されていないようで通関窓口が少なく時間がかかった。

荷物をピックアップしてバスで20分ほどで市の中心部のホテルへ。

チェックイン後、三々五々夕食に出る。

土曜日で夜の賑わいは22時以降。

日没が遅く、人出も日本の感覚よりかなり遅い。

ホテル近隣で評判の良いレストランを紹介してもらう。

ホタテをチーズなどを混ぜてグラタン風にしたもの

キノコ料理、サラダなどを注文したが、味は日本人にも受け入れられるものだった。

インファンテ・デ・ザングレス ホテル泊

## ★第2日 8月26日(日)

### ■世界遺産ポルト市内観光

青いタイル「アズレージョ」が美しいサン・ベント駅(○)、

サン・ベント駅があるのは周囲に歴史的建造物が点在するポルト観光の中心地。街歩きの起点にもなっている。1900年、修道院の跡地に建てられたサン・ベント駅は、重厚感漂うクラシカルな外観が特徴。ポルトガル人建築家ジョゼ・マルケシュ・ダ・シルバによって、フランスのボザール様式の影響を受けて設計された。駅構内に足を踏み入れると、壁一面にアズレージョの世界が広がる。アズレージョとは、ポルトガル伝統の装飾タイルのこと。14世紀初頭にスペインのセビーリャから輸入したムーア人のタイルを起源とし、これをもとに16世紀からはポルトガル独自のタイルが制作され始めた。ポルトガル建築の外壁や内壁に用いられるアズレージョは、装飾目的であると同時に、室温管理の機能も果たしている。サン・ベント駅構内のアズレージョは、ポルトガルを代表するアズレージョ画家、ジョルジュ・コラコによって1930年に制作されたもの。ジョアン1世のポルト入城やセウタ攻略などポルトガルにおける歴史的な出来事が描かれている。まさに、青のタイルで表現された壮大な歴史絵巻。爽やかであると同時にどこか神秘的な雰囲気が漂う青の世界に魅せられる。駅舎のレトロなデザインは今見るとかえって新鮮。「切符」「インフォメーション」といった表示すら可愛らしく見える。

### ★ボルサ宮

19世紀に建てられ、名前に「宮」がつくことから、宮殿を思われるかもしれないが、ポルトの商業組合本部であり証券取引所として使用されていた。内部には、裁判が行われていた「法廷の間」やスペインのアルハンブラ宮殿(1982年に世界遺産登録)を模倣した「アラブの間」、「黄金の間」などがある。日本人として興味深い場所が「紋章の間」。ここにはポルトガルの紋章を囲んで、ポルトと関わりの深かったオーストリア=ハンガリー帝国、ザクセン、フランス、イタリア、ベルギーなど19カ国の紋章が描かれている。2015年「紋章の間」の壁画が修復されたが、その作業中に、ザクセン王国(ポルトガル王フェルナンド2世の出生地)の紋章の下から徳川家の「葵紋」が発見された。江戸幕府は、1860年にポルトガルと修好通商条約を締結し、その後1865年にはポルト国際博覧会に徳川家から使節団が派遣されたので、その記念として描かれたのではないかと考えられている。

## ■ドウロ川クルーズ

◇所要：約1時間

ドウロ川はイベリア半島を流れる重要な川。スペインのソリア県を水源とし、スペイン北部を流れポルトガルに入り、ポルトから大西洋に注ぐ。全長は897kmであり、ポルトガルを流れている部分においては軽い船なら航行可能である。スペインにおいてこの川はかつてのカスティーリャ王国のメセタを横断する。

この地域の沿岸では、小麦やワイン用のブドウの栽培、羊の放牧などが行われている。途中112kmは、スペインとポルトガルの国境線の一部を形成する。この近辺では川は狭い谷間を作り、互いの侵入に対する障害となっていた。言語の境界もこの川上にある。この地域は国際ドウロ自然公園として保護されている。

なお、2014年現在において、最も下流（河口近く）にかけられている橋は、アハビダ橋である。

ポートワインは、この地域のブドウを使って作られる。多国籍のワイン業者が所有する quintas や農園が川岸に向かって斜面一面に広がっているさまは絵に描いたように美しく、観光に訪れる価値がある。

伝統的に、ここで造られたワインは下流に運ばれ、ヴィラ・ノヴァ・デ・ガイアで樽に詰められ地下で貯蔵される。かつてはワインの輸送には平底の船が使われていたが、1950年代から1960年代にかけて、いくつかのダムが建設されたため、現在ではタンカートラックによる輸送に切り替えられている。

近年では、ポルトから上流の渓谷までの観光ツアーが人気がある。小さいボートを使用して、ダムの水門を抜けて上流まで遡行する。

## ■聖サンフランシスコ教会

ゴシック様式の教会。バロック様式の内部装飾で知られている。教会は市内の歴史地区にあり、ユネスコの世界遺産に登録されている。ポルトでフランチェスコ会が設立されたのは13世紀である。修道士たちは反感を買い、他の会派

に属する聖職者や世俗の信徒から迫害された。ローマ教皇インノケンティウス5世の教書が出されるに及んで、修道院としての土地が彼らに寄進された。修道士たちは最初すぐに、聖フランチェスコへ捧げる小さな教会の建設にとりかかった。修道士たちは、ポルトガル王フェルナンド1世の庇護の元で1383年にこの小さな教会を拡張し、ポルトガルの托鉢修道会のための典型的な、簡素なゴシック様式設計でさらに広い教会を建て始めた。この建設工事は1425年まで続いた。教会全体の建設工事は広範囲に変更されず、サン・フランシスコ教会はゴシック建築の良い例となった。多彩色の花崗岩でできた聖フランチェスコ像（13世紀）が入り口隣に立っており、これは初期の時代の遺物である。

教会のメイン・ファサードは大きく、精巧なバラ窓はゴシック様式である。これだけがファサードの原型部分である。主出入口はソロモン式円柱のある、今や典型的バロック様式となっている。しかし川と向きあう南側出入口は今もゴシック様式である。

15世紀から16世紀に、いくつかの貴族家がこの教会を菩提寺とした。17世紀と18世紀には、これら側礼拝堂が、金箔を貼った木工細工で大いに装飾された。この装飾的豊富さがフランシスコ会派の教会として知られる存在となり、最初の教会建築がすっかり隠されてしまった。金メッキの木は完全に、側廊の屋根、柱、窓枠、礼拝堂を覆った。

祭壇後方の棚に囲まれて、主礼拝堂で最も重要で人気があるのは、『キリストの木』を表した物である。この多彩色の木工細工は、フィリペ・ダ・シルヴァとアントニオ・ゴメスの手で彫られた。ユダ王国の12人の王たちとイエスの家系図は、イサイ（ダビデ王の父親）の横臥像とつながる。木のとっぺんには聖ヨセフがおり、下に聖母子の彫刻がある。壁のくぼみには聖アンナと聖ジョアキン（聖母マリアの両親）、『無原罪の御宿り』について記した4人のフランチェスコ会士の像が収められている。

バロック期の金箔細工が、ゴシック建築の教会と完全に調和していないとしても、バロック期の内部装飾はポルトガルで最も傑出したものの一つとみなされている。この富はフランチェスコ会の清貧さと完全に不一致であり、ポルトの町の聖職者の肉体に刺さるトゲとなって、彼らは信仰のための教会を閉じたのである。

- ◆市内のレストラン「オ・トリペイロ」にて昼食  
鰯の唐揚げ、鰯のマリネ、タコのサラダ、タコの天婦羅、タラ料理各種、ポルト名物モツの煮込みなどポルトガルならではの各種おつまみ料理をお取り分け

## ■ポートワイン醸造所 サンデマン

酒精強化ワインはイベリア半島など気温が高く温度管理が難しいブドウ栽培地域において、酸化・腐敗防止など保存性を高めると同時に、味わいに個性を持たせるために工夫されたワイン群である。

保存性の良い酒精強化ワインは長期の輸送に耐えるため、船便による遠国への輸出にも向いたものであった。特にスペインやポルトガルのものは、18世紀に英仏関係が悪化してフランスとの取引が低迷したイギリスへワインを輸出するために発達したとも言われている。

酒精強化は、液中のアルコール分が一定量を超えると酵母が働かなくなり、アルコール発酵による糖の分解が止まる現象を利用している。添加アルコールには、ワインと同様にブドウを原料としたブランデーが多く用いられる。通常のワインのアルコール度数が概ね10-14度であるのに対し、酒精強化ワインは18度前後になる。発酵のどの段階でアルコールを加えるかで甘口・辛口の違いが生じる。基本的に、未発酵もしくは発酵途中に加えると糖分が多く残るために甘口、発酵後に加えたものは辛口となる。食前酒（アペリティブ）または食後酒（デザートワイン）として利用される。前者は酒精強化ワインの高いアルコール分による胃への刺激、食欲の増進を期待したもので、辛口のドライ・シェリーなどが好まれる。後者としては、消化の促進とともに食後の満足感を高める甘口のものに向く。飲用の他、菓子の風味付けや料理のソースなどにも利用される。

スペインのシェリー、ポルトガルのポートワイン・マデイラワイン、イタリアのマルサラワインなどがある。

## ポートワイン

日本に初めてもたらされたワインとされており、その出荷港がポルト港であったためにこの名が付いた。ポルトガル北部のドウロ川沿岸が産地。原料となるブドウの品種は多彩で、全29種がポートワインの推奨品種となっている。発

酵途中にブランデーを加えるため甘口となる。オーストラリアや南アフリカでもポート・タイプのワインが作られている。ポートワインには以下のタイプがある。詳細はポートワインを参照。

ルビー・ポート : 若い甘口で熟成期間が2-3年と短く、果実香が豊か。  
もっとも一般的なタイプ。

ホワイト・ポート : 白ブドウを原料とする。甘口から辛口まである。

トウニー・ポート : 黄褐色をしている。熟成期間は10年程度。  
安価なものから高級品まで。

ヴィンテージ・ポート : 作柄のよい年に収穫されたブドウだけで作られる高級品。さらに澱を丁寧に除いたレイト・ボトルド・ヴィンテージ・ポートもある

#### 【オプション】 夕食とポルトの夜景ドライブ

◎所要 : 約3時間半 (往復専用車送迎付)

◎同行TD、西村先生同行

◎ワンドリンク付

◎市内のレストラン「Muralha Do Rio」にてシーフードのリゾット

ポルトガル北部の銘酒ヴィーニョ・ヴェルデと共に

夕食後は、ドウロ川のドン・ルイス I 世橋の夜景を鑑賞

ポルト泊



## ●国名となった「ポルト」 その語源は「カレの港」

町の発祥は、青銅器時代の後期、紀元前8世紀頃。当初から地中海と結ぶ重要な港町であった。ローマ軍が進駐すると、首都ブルガとローマを結ぶ拠点となる。その時代にこの町はカレと呼ばれ、カレの港「ポルトゥ・カレ」がこの国の名ポルトガルとなった。

997年にフランス・ブルゴーニュの貴族であるエンリケ伯爵が、教会や平民騎士、十字軍、テンプル騎士団などの支持を得てレコンキスタ（国土回復運動）を起こす。これによりエンリケ伯はポルトゥ・カレ伯となる。その息子でポルトの北東30キロのギマランセスに生まれたアフォンソ・エンリケスがレコンキスタを達成し、カスティリア王国（現在のスペインの一部）から分離独立して、ポルトガルの初期王朝が始まる。

しかし一時は強権を持った王家も、14世紀後半の黒死病（ペスト）がヨーロッパを襲ったころから衰退する。黒死病を恐れた貴族や地主が恐怖にかられて教会や修道院に土地財産を寄進、国王の税収が減少したのが原因であった。

隣のカスティリア王国が再び食指を伸ばしてきたことも影響し、世継ぎを残さなかったフェルナンド王の代わりに、第二のアヴェス王朝が興る。この時にイギリスの弓兵の助力を得たことから、これ以降、カスティリアとの対抗上イギリスとの同盟が強化されることになる。イギリス軍はたびたび出動して、この国を救った。

このあたりの歴史がポルトの町が形成される重要な背景となっている。国王と教会は所領と裁判権をめぐって激しく争ったが、何せ当時はローマ・カトリックの文化と宗教が教育も含めて民衆を強く支配していた。ポルト中心部にはローマ以来の道が残っている。その道に平行して駅からカイス・ダ・リベイラに至る車道はかつて川であった。下水溝となっていた様子が、川口の所によく分かる。

この川はまた司教と王との課税境界線でもあった。つまり司教は高台にふんぞり返り、王は低地に館を建てていたと言う図式が見えてくる。

対岸のヴィラ・ノヴァ・デ・ガイアも、こうした司教との軋轢から、王が開港したとも伝えられている。こうして聖職者に集まった富は教会や修道院に蓄積された。金色に輝く豪華絢爛なサンタ・クララ教会やサンフランシスコ教会を見るにつけ、宗教の力がいかに強力であったか思い知らされる。そして王家の収入が半減し、貴族も地代収入が減るといふ経済的危機の打開策として海外進出を選んだのが、大航海時代のきっかけとなった。

14世紀の半ば、ポルトのカイス・デ・リベイラの西にあるエンリケ航海王子広場と道を隔てたところの生まれたエンリケ親王（エンリケ航海王子）は、キリス

ト騎士団長として、この遠征航海を積極的に主導した。北部ミーニョ地方のヴィアナ・ド・カステロやポルトで船を建造し、乗組員を募ってアフリカ北岸を攻めた。その時、市民は町の中の肉類をすべて旅立つ船に持たせ、自分たちは残りの臍物で我慢したところから、モツ（トリッパ）喰いのポルト人を意味する「トリペイロ」の異名が生まれた。

ともあれエンリケ航海王子の行動は金と奴隷の獲得を容易にし、この国に膨大な富をもたらした。それとともに、マデイラ島を含む大西洋諸島でのサトウキビ栽培、アフリカのギニア湾への進出、ヴァスコ・ダ・ガマによる喜望峰経由のインド航路の開拓、アジアの香辛料獲得、ブラジルの領有と続く。こうしてポルトガルの全盛時代の端緒を作ることともなった。

## ●ポートワイン

アルコール分が強く甘いデザートワイン、ポートワインは、ポルトガル政府による厳しい規制と管理の下、ドウロ川上流地域でのみ作られる。熟練の職人たちが、何百年も受け継がれた技法で地元産のブドウをブレンドし、ポートワインの名を冠する数種類の上質なワインを作り上げるのだ。

どのポートワインにも共通するのが、発酵の過程でブランデーを加える作業だ。つぶしたブドウから出た糖分の半分ほどがアルコール化したところで、アルコール分の高いブドウブランデーをたっぷり加える。これで発酵が途中で止まり、甘さとコクをうむ。

ブドウの当たり年なら、出来上がるポートワインはヴィンテージ（銘酒）となる。通常はまずほかの上質の品種のブドウと混ぜ合わされ、樽に2年間入れられた後、ボトルで熟成する。数十年後、この極上のポートワインは飲み頃を迎える。

普通のポートワインは、より長期間樽で熟成させた後、ボトルに入れてすぐに飲まれる。ルビーポートはヴィンテージより軽いフルーティーなワインだ。タウニーポートはより若く、濃厚で味が強いワインから作られる。このためタウニーはルビーよりずっと長期間熟成され、まろやかな香りが引き出される。“タウニー”という名前は、長年樽に入れられていたワインの、褪せたような色のことをさしている。

## ★第3日 8月27日(月)

### ●ポルトガルの自然環境

3万4500平方マイルの面積と973万の人口を持つポルトガルは、小国ながら文化・気候・地形の面ではきわめて多様な地域を形成している。気候は南と北では極端に異なっている。アルガルヴェ地方は夏は乾燥期が6ヶ月も続くが、ミーニョ地方ではわずか2ヶ月である。リスボンやアルガルヴェでは霜はほとんど降りないが、ベイラやトラス=オス=モンテスの高原は毎年降雪がある。およそ34万人の人口を持つポルトはリスボンにつぐポルトガル第2の大都市である。ポルトは伝統的に自由を愛する伝統をもち、中世には貴族は都市の城壁の中に住むことを許されなかった。また多くの自由主義的な反乱はこの地で起こったのである。

ポルトガル人は大西洋型であって地中海型ではない。概して彼らは内向的で、もの静かでひかえめである。この点で外向的ラテン系諸民族とは異なっている。ポルトガル人の気質を最もよく伝える言葉はサウダージであろう。これはスペイン語には存在しないきわめて微妙な陰影にみちた言葉である。つまり、それはある場所、人をなつかしむ甘美さとほろ苦さの混りあった複雑な感情で、ポルトガル文学に繰り返して現われる重要な主題である。

国土再征服運動はポルトガルの国民感情の形成にそれほど大きな影響を持たなかった。影響したのはむしろカスティリヤの権力拡張への野望に対する反発であろう。スペイン人が陽性なのに対してポルトガル人は陰性である。したがってスペイン人の誇り高い情熱的な性格とは異なり、ポルトガル人はメランコリッ

クでやや優柔不断であるが、センチメンタルで憐れみ深く、「可哀<sup>コエタディーニョ</sup>そうに！」という単語がひんぱんに用いられる。

スペイン人はポルトガル語を風邪をひいたスペイン語と嘲笑をまじえて呼ぶ。このような印象を与えるのは、まずポルトガル語には鼻音が多いことによる。さらに母音の種類もきわめて多いので、メロディはスペイン語のように単純で歯切れがよくない。しかし陰影が複雑なので、その抑揚はきわめて表現力豊かである。ちなみにスペイン語には母音が5つしかないのに、ポルトガル語には13、さらに鼻音の母音が5つある。子音の数もスペイン語よりははるかに多く、Sだけでも4通りある。

## ●聖ヤコブが眠るキリスト教の聖地

### サンティアゴ・デ・コンポステーラ

イベリア半島北西端に位置するサンティアゴ・デ・コンポステーラは、エルサレム、ローマに次ぐキリスト教3大聖地のひとつ。9世紀初めに聖ヤコブ、すなわちサンティアゴの墓がこの地で発見されて以来、ヨーロッパ各地から数多くの巡礼者が訪れる聖地となった。ピレネー山脈からスペイン北部を横断したサンティアゴへといたる巡礼の道、カミノ・デ・サンティアゴはおよそ800km。今も中世の人々が歩いたのと同じ道を徒歩で、自転車で、あるいは馬でたどる巡礼者たちの姿を見にすることができる。

## ●ボタフメイロ

スペインガリシア州のサンティアゴ・デ・コンポステーラにある巡礼地の目的地である大聖堂に存在する著名な巨大振り香炉。この香炉は焚いた香を入れた後、聖堂内を振り子のように振る儀式に使われている。「ボタフメイロ」とはガリシア語で「煙を吐き出すもの」の意味。

世界で最も大きな香炉の一つで重さは80キロくらい。高さが1.60mある。現在のボタフメイロは黄銅の合金と青銅で作られ、20 $\mu$ mの銀でメッキされている。金色の光沢がある。通常は教会の展示室に置かれているが、重要な宗教儀式が行われる際には大聖堂に運ばれて滑車から伸びるロープに繋がられる。

ロープは20年程度で交換されている。現在は以前より太いロープが使われるようになったため、摩擦による摩耗が強くなり寿命が短くなっている。2004年のロープ交換も当初の予想よりも早めに行われた。40kgの炭と香がシャベルを用いて充填される。ロープは外れないように複雑な結び方でボタフメイロと繋ぐ。香炉を振る時は、初めは人力で香炉を押して始まる。8人の赤いロープを着た男性がロープを引っ張り、徐々に香炉の振り幅が大きくなっていく。振りによって翼廊の天井近くまで香炉は届くほどになる。この時のスピードは68km/hにも達し、聖堂に集った民衆に香が行き届くようになる。儀式には毎回250€がかかる。高価ではあるものの、訪れる巡礼者や旅人、観覧者は絶えない。伝承では、11世紀にサンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂大聖堂に到着した巡礼者は疲労し不潔な状態の者が殆どであった。ペストや伝染病が猛

威を振るった時代に、香は病の予防効果があると信じられていた。15世紀にルイ11世（フランス王）が教会に寄付を行い、1554年に新しい銀の香炉が使われ始めた。装飾で名高かったこの香炉は、スペイン独立戦争（1808-1814）の際にナポレオンの軍勢によって1809年4月に持ち去られてしまった。1851年になり Losada の制作した現在のボタフメイロが代わりに据えられた。

過去、ボタフメイロのスイングによって数件の事故が発生している。ロープから外れてしまうためにフックの付いたロープが使われた時期もあったとされる。著名なものの一つにキャサリン・オブ・アラゴン来訪時の事件がある。アーサー王太子との婚姻に向けた旅の途中であった1499年に妃は大聖堂を訪れていた。その際にボタフメイロが聖堂の高窓を破って飛び出してしまった。この時は人的被害がなかったとされる。

1622年、1925年、1937年には、ロープとボタフメイロを繋ぐ器具が破損する事故が起きている。1622年にはボタフメイロが Tiraboleiros の傍に落下した。1937年7月にもボタフメイロが落下し、燃えた石炭が地面にまき散らされる事故が発生している。現在では対策として「セイラズノット」でボタフメイロは繋がれている

### ●キンターナ広場

サンティアゴ・デ・コンポステーラのカテドラルの裏側には免罪の門がある。免罪の門は1611年に名匠マテオの手によって作られた。預言者の像で飾られています。キンターナ広場はその門に面していて、7月25日の聖ヤコブの日が日曜日と重なる聖年にのみ門が開く。広場には、この門の他にも、歴史的建造物に面しているので常時、観光客や巡礼者で賑わっている。

### ●パラドール

スペイン、プエルトリコなどスペイン語圏にある比較的高級なホテル・チェーンを指す。パラドールはスペイン語で休息所の意味があり、通常スペイン、プエルトリコなどスペイン語圏にある比較的高級な、あるいは高級そうなホテルの名称に使われている。

スペインでは古城などを改装したり、景勝地に新しく建てた半官半民の宿泊施設網で、1928年に始まり、2007年時点で91か所ある。ここでは王立病院を改装してホテルとしている。

## ★第4日 8月28日(火)

### ★サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路

キリスト教の聖地であるスペイン、ガリシア州のサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路。おもにフランス各地からピレネー山脈を経由しスペイン北部を通る道を指す。

サンティアゴ・デ・コンポステーラには、聖ヤコブ（スペイン語でサンティアゴ）の遺骸があるとされ、ローマ、エルサレムと並んでキリスト教の三大巡礼地に数えられている。フランスでは、「トゥールの道」、「リモージュの道」、「ル・ピュイの道」、「トゥールーズの道」の主要な4つの道がスペインに向かっている。スペインでは、ナバラ州からカスティーリャ・イ・レオン州の北部を西に横切り、ガリシア州のサンティアゴ・デ・コンポステーラへ向かう「フランスの道」が主要である。

1000年以上の歴史を持つ聖地への道は、今も年間およそ10万人がフランスからピレネー山脈を越えてゆく。スペインに入ると、巡礼の拠点の街が見えてくる。そこには巡礼事務所があり、名前を登録し、巡礼者の証明となる手帳を受け取る。巡礼者の数が増えると共に、道沿いには無料の宿泊所が整備されてきた。11世紀の礼拝堂を修復した宿泊所などもあり、こちらの宿では中世さながらの「洗足の儀式」が行われる。巡礼者の足を水で清め、旅の無事を祈る。食事も用意される。これらは巡礼を支える人々の無償の奉仕で成り立っている。徒歩によるスペイン横断は、イベリア半島内でもおよそ800kmの道程である。長い巡礼を続けることは、人々にとって信仰と向き合う貴重な時間となる。大聖堂の5km手前にある「モンテ・デル・ゴソ（歓喜の丘）」。巡礼者はここで初めて美しい聖地の姿を眼にする。徒歩でおよそ一月の道程。大聖堂に到着した巡礼者は、「栄光の門」と呼ばれた入り口に向かう。そこには幾千万もの巡礼者がもたれるように祈りを捧げてきた柱がある。手のくぼみのあとが歴史を物語っている。巡礼路のうちスペイン国内の道は、1993年に「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」としてユネスコの世界遺産に登録された。登録された道は、後述の「フランスの道」と「アラゴンの道」に相当する。2015年に拡大登録されるとともに、登録名称が変更された。フランスの巡礼路の一部と途上の主要建築物群については、「フランスのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」として1998年に別途登録された

## ★「スペインの歴史」

スペインという国が世界史の舞台に統一国家として登場したのは、1479年、カスティリヤのイザベルとアラゴンのフェルナンドが結婚して、主権連合を宣言したときに始まる。この二人は1492年、イスラム教徒の最後の拠点グラナダを陥落させて、700年にわたった国土回復運動を完了した。8世紀以来イベリア半島を支配してきたイスラム教徒が、ようやくここに駆逐されるのである。同じ年の10月、コロンブスが今日の西インド諸島に到着した。ヨーロッパ人からすれば「新大陸」の発見であった。ここにスペインは、「世界に日の沈む所はない」といわれる大帝国への輝かしい第一歩を踏み出した。また、それは、同時に世界が文字通り一つに結ばれて世界史が生まれる始まりでもあった。

「新大陸」の発見と過酷な植民地支配で富んだスペインに「黄金の世紀」をもたらしたのは、イザベル夫妻の孫にあたり、ハプスブルク家の血統を引くカルロスであった。ブルゴーニュ・オランダ・イタリアなどがスペインと合体され、そのうえ、彼は神聖ローマ帝国皇帝の地位をも獲得して、スペインをヨーロッパの中心に据えた。このために、かつてないほど多数のスペイン人が、ヨーロッパを舞台に繰り広げられる華やかな国家的活動に参加し、「神に選ばれた民族」という自信と誇りを得た。カトリック両王の孫カルロスは、フランドルで育ち、スペインにやって来たときは、スペイン語も話せなかった。彼はフランドル人を要職につけ、カスティリヤの議会を無視し、たえずスペインを留守にして民衆の反感を買い、有名なコムネロス（自治都市民）の反乱を招いた。カルロスは、カトリック両王以来の十字軍の伝統を受け継いで、ドイツ国内のプロテスタントやオスマン＝トルコなどを相手につぎつぎに戦いを起こした。

カルロスのあとを継いだフェリーペ二世の時代には、スペインの繁栄は絶頂に達した。この頃のスペインは、フランスとの敵対関係、イスラムのみならずプロテスタントとの戦争、オランダの独立運動などの難問題を抱えていたが、それ

でも1571年レパントの海戦でトルコの軍隊を破るまでは、ヨーロッパにおけるスペインの優越した地位を保持していた。1580年にはポルトガルを合併してイベリア半島の政治的統一が成った。また、新たに首都となったマドリッドには絶対君主の栄華をきわめた宮廷生活が出現した。しかし、繁栄の裏にはすでに衰退の影がしのび寄っていた。1588年、オランダ独立戦争を援助したイギリスに制裁を加えようとして送った「無敵艦隊」と誇ったスペイン海軍が、イギリス海軍の前に壊滅した。これは、イギリスとスペインの運命の分れ目といつてよいかも知れない。以後、スペインは没落の一途をたどることになる。

日本にはじめて現れたヨーロッパ人はポルトガル人であった。

1543年、種子島に漂着したポルトガル人がもたらした鉄砲は、封建日本の戦術を一変させた。ついでフランシスコ=ハビエルをはじめとしてスペイン・ポルトガルの宣教師が日本で布教を開始して、日本人の視野を一挙に拡大した。ここに日本とヨーロッパとの関係の発端があった。その後50年たって九州にオランダの黒船が現れてからは、その後わが国と通商を行なったのはスペイン・ポルトガルではなく、新興のオランダ・イギリスであった。17世紀に『ドン=キホーテ』が書かれた頃には、世界にまたがるスペインやポルトガルの座はすでに失われていたのである。

スペインの統一は、1580年のポルトガルの合併で頂点に達するが、オリバレス首相の統一政策が強硬にすぎたために、ポルトガルとカタルニアの反乱を招き、ポルトガルを再び失うことになる。経済的に衰微したカスティリヤが富裕な他の地方を支配することは無理であった。その後2世紀にわたって、経済力と政治力との分離が続き、旧来の地方分立の傾向が再び復活した。

また、王室の官職は次第に世襲化し、一種の閉塞的階層を成すにいたって、官僚制はカトリック両王時代の新鮮なダイナミズムを失い、不毛化した。またきびしい年功序列制のために、要職についての官吏は中高年者で、すでに職務に対する



意欲に欠けていた。さらに、賄賂などによる道徳的腐敗も始まった。カルロス一世に仕えた諮問院の長官コボスは、無一文から始めて、晩年にはカスティリヤの最も裕福な貴族と肩を並べるにいたったといわれている。

『ドン=キホーテ』の中でも官僚の無能ぶりはきびしく批判されている。17世紀には行政は諮問院の手を放れて、少数の王の寵臣の委員会に移った。フェリーペ三世は過去の伝統に反してアンダルシアの大貴族を要職につけた。レルマ公は官僚界の腐敗を許し、公職を財力で獲得しようとする者たちに操られるままになった。このようにして早急に作り上げられた官僚機構は、その実態は老朽化し、いわゆる寵臣政治が生まれるのである。

イザベルが、コロンブスの新航路発見の航海を援助することを決意した裏には、東方の国々の協力を得てトルコに対して十字軍を編成しようという軍事的・宗教的意図があった。しかし、コロンブスはこのような十字軍、あるいは再征服の伝統には無関心であった。ジェノヴァに生まれ、ポルトガルとアンダルシア地方に住んだことのあるコロンブスは、むしろ中世の商業の伝統を引いていた。

1519年から40年にかけて新大陸の征服は終わり、アステカとインカの廃墟の上にスペインの新帝国が打ち立てられた。

植民地経営においてスペインの最大の失敗は、海外から流入する金銀を利用して自国の経済的発展を促進するにいたらなかったことである。ペルー北部のポトシ銀鉱の発見によって、銀は金の産出を超え、16世紀後半には、新大陸での産金がヨーロッパの全産金額の五分之一であるのに対して、銀はその三倍に上った。

インフレーションの最大の原因は銀の流入ではなく、新大陸の発見による需要の増大に見合う農業生産力の基礎が薄弱であったことにある。メスタ（牧羊者組合）を保護するあまり、農業を無視したのは、カトリック両王以来のスペイン王室の大きな誤りであった。このために穀物の供給が減り、民衆は、しばしば飢

饑と疫病に悩まされた。しかし、王室はこのような民衆の苦しみには目を向けず、国内の生産力を育成する代わりに外国の商品を新大陸に輸出して貿易の利潤を高めようとした。このために、セビリャに到着する銀は、イギリス・オランダなどの商人の手に落ちた。スペインの産業は次第に他のヨーロッパの国々との競争に敗れてゆくのである。またスペイン王室が、カスティリヤ経済の支えとなる生産力を新大陸に育成するための組織的計画を欠いたことは、17世紀にはいって否定的な結果を生み出した。カルロス一世は、メキシコに生糸産業を育成し、グラナダと競争関係に入ることを容認したのである。新大陸にはスペイン本国に類似した生産構造ができ上がり、メキシコには生糸産業が成立し、ペルーは穀物・ぶどう酒・オリーブ油などを産出し始めた。このようにして16世紀の終わりには、スペインと新大陸の経済は分離し始めた。

フェリーペ二世のスペインはヨーロッパにおける反宗教改革の拠点となった。宗教的なファナチズムは軍国主義と結びついて不毛な戦いによって国を疲弊させた。また、フェリーペは1558年には外国からの書物の輸入を禁じ、ローマに頼らずスペイン独自の禁書目録を作り、外国への留学を禁止した。フェリーペ時代の文化的鎖国は、スペインの科学・技術の後進性を招き、ヨーロッパの近代思想はスペインをす通りしてしまった。

日本に多くの宣教師を送ったイエズス会はこのような精神的風土の中で生まれた。イエズス会は今まで修道院にこもって祈禱と瞑想に日を送っていた僧侶たちを街頭に引き出した。兵士としてのきびしい訓練を受けたイエズス会の僧侶たちは、インド・セイロン（現スリランカ）・中国・日本などでも布教活動を行ない、反宗教改革の尖兵となり、カトリックの精神的再生に寄与した。

しかし、一方では、強大化する教会は、聖職者の数、また独身者の数を増加させ、生産活動に従事する人口はますます激減した。貴族・僧侶は人口の7分の1を占め、社会の寄生虫と化した。

## ● 門前町の経済学

今日の消費者は切実に欲しいものがないのではないか。

若い人はともかく「GS世代」ともなればなおさらだ。

「縁日そぞろ歩き風 仲見世冷やかし風」の消費者で、商業施設に遊びには行っても、買い物はあまりしない。

その「縁日そぞろ歩き風 仲見世冷やかし風」が多いのは当然門前町だろう。

商店街の多くは疲弊しているが、私が全国を取材し比較的うまくいっていると思うのは門前町商店街だ。浅草仲見世通り、鎌倉小町通り、名古屋大須、大阪天神橋筋など全国的に知られるところも少なくなく、また顧客に高齢者が多いのも特徴だ。

今回は特別編として初詣も近いので「門前町の経済学」と題してその特質を考察したい。

門前町の第一の特徴は、知名度が高く広域集客が可能なことだ。

「御本尊様」のネームバリューをフルに活用できる。

第二に街並みの統一感が出しやすい。白壁に家並みを揃えたり、鳥居と同じ朱塗りの街路灯を並べたり、石畳にしたりと参道ならではの統一感がある。

第三の特徴は、商品にオリジナリティがあること。

「おばあちゃんの原宿」巣鴨地藏通商店街には大型店では揃えにくい中高年向けの下着や履きもの、健康関連の食品がズラリと並ぶ。浅草仲見世通りなら雷おこしに人形焼に羽子板、長野善光寺商店街ならおやきに野沢菜に信州そばといった具合だ。

四番目は、販促イベントが組みやすいことだ。

「縁日」や「祭礼」という「ハレの空間」を提供することが消費の喚起につながる。門前町商店街は神社仏閣の行事とつながりが深く、商店街が心を一つにイベントの成功にまい進する。

門前町商店街の五番目の特徴は、「行った人は戻ってくる」ことである。

往路はいわば下見、まずは参拝が主目的だ。

さい銭を投げ手を合わせると、気分は買い物モードになる。

「ああ、お腹がすいた。そうだ、みやげも買わなくちゃ」。

往きで商店街の全貌はすでに把握している。商店街がシャッター通りと化し、単なる通り抜け空間になっていれば歩足も速く、モノを買う雰囲気も生まれえない。

初詣のついでに門前町を観察すると、ビジネスヒントが見えてくる

## ●味の明太子 ふくや

福岡の名物と言えはまず思い浮かぶ明太子、戦後の混乱期にこの食品を作り出し、あえて特許を取らず地元の水産加工業者共通の製品として広めたのが、ふくや創業者の川原俊夫氏である。

その老舗で、このところヒット商品が相次いでいる。

「昨年発売した『めんツナかんかん』は一年で100万缶、累計200万缶を突破しました」

こう語るのは今日就任する川原武浩社長だ。

「ツナを明太子の調味液で味付けした缶詰です。明太子は生ものですから、外国人旅行者がお土産に持ち帰れません。何とか福岡の味を持ち返っていただきたいというのが開発動機でしたが、実際にはお年寄りからお子さんまで日本人にもたくさんお買い上げいただいています」(川原さん)

また2013年1月、粒タイプのチューブ入り明太子「tubu tube(ツブチューブ)」を発売したところ初年度の販売数2万本。2015年度には12.5倍の25万本にまで伸び、すっかり定着した。

「ポップなパッケージで若者の旅行客から人気が出ましたが、それ以上に調理になるべく包丁を使いたくないという高齢者に広まっているのがメガヒットの秘密と分析しています」(川原さん)

中元・歳暮の習慣が減ってきていることや、コメの一人当たり年間消費量も年々減少していることなどを考えると、「贈答、ごはんの友」というコンセプトで全国区商品になった明太子も、将来像を描きにくくなっている。

ごはん以外でも食べられるメニュー提案、常温品の開発といった新規分野の開拓にトップ企業ふくやは挑戦している。

「昨年から明太子の皮を利用した商品、『醬明太(ひしおめんたい)』を発売したところ年間3万個の計画が発売8か月で4万個を越え、原料が足りなくなる事態になっています。国内市場縮小に向けて海外向けブランド「鱈卵屋」の名で香港・台湾に進出、北米・豪州に向けては缶詰の輸出も計画しています。創業者・川原俊夫の『味は守るな、常に顧客に合わせて進化させる』との教えに従い、時代の変化に合わせて積極的な商品開発を続けていきます」

川原社長はこう決意を語る。

## ●豊味館などシニア対応ビジネス

2018年は後期高齢者人口が前期高齢者を上回り始める年になる。

戦後のベビーブーム世代が、2020年のオリンピック以降続々後期高齢者の仲間入りをしてゆく。

日本の平均寿命は80代だからまだ多くの人は生きてはいるが、これまでの経験則から見ると、後期高齢者になると旅行や外出が次第に減りがちとなる。

後期高齢者のおよそ10人に1人は老人施設などへの入所が必要になってくる。

いよいよ本格的な高齢社会だ。

今回はそれに対応する企業の取り組みを紹介する。

おかゆと聞いてどんな連想をするだろうか？

お腹をこわして何も食べられないときに、母親に作ってもらったおかゆをようやく口にしたときの美味しさと、早く普通のご飯が食べたいという気持ちが重なる……。

「病中病後、あるいはこってりした中華コースを食べた翌朝の軽めの食事など、おかゆは体に優しいと感じている方が多いと思います。栄養バランスも考え、元気な時にでもおいしく簡単に食べていただけるようなおかゆを考えました」

こう語るのは豊味館の松尾あゆみ社長だ。

豊味館が「もち米おかゆセット」を発売して3年、静かだが少しずつ売り上げを伸ばしている。

「豚なんこつ、彩り野菜とベーコン、若鶏と栗と3種類あります。これまでのお粥の概念を覆す「具だくさんのレトルトパック入り」のおかゆです。栄養価も高く、また歯の弱いお年寄りでも食べられると、まとめ買いで常備するお客様が増えています」（松尾さん）

豊味館は長崎県佐世保市にある。グループ会社の丸協食産はホルモンなどの精肉メーカーだ。豊味館はスーパーなどを販路に日常必要な肉を販売する丸協食産とは一線を画し、土産や贈答など付加価値の高い商品提案をしようと10年ほど前に設立した。

「人の拳くらいの大きな牛テール肉の入ったレトルトカレーや黒豚ロールステーキなどこれまでヒット商品を出してきました。ある時韓国料理サムゲタンの開発依頼があり商品化しましたが、あまり国内市場は広がりませんでした。その後教訓を生かし、お肉に主体を置き、薬膳の具材や野菜を加え「ライトな主食感覚のおかゆ」という、日本人に合った新しいコンセプトにたどり着きました」（松尾さん）

常温で保存ができ、ダイエットにも、お年寄りの日常食にも適した商品として提

案したところ、通販や病院、調剤薬局の店頭などから注文が来るようになった。

「おかゆはもともとは家庭内で体の弱った家族のためにつくるものです。食の外注化の中で、家庭料理になりかわってご提供する新しいおかゆ市場を作りたいと思います」（松尾さん）

核家族化、高齢社会に新たな販路を拓けるか、松尾さんは手ごたえを感じている。

続いてはペットショップの事例だ。

ペットを飼う家が増えてきたことは事実だが、ここにきて購入するペットにも変化が出ているようだ。

「実はここ数年ヒット商品が出ています。それは小鳥なんですよ」

こう話すのは、首都圏を中心にペットの総合専門店を展開する「ペットエコ」の米山由幸取締役だ。

「当社の売り上げを見てもここ数年小鳥の販売が伸びています。イヌよりもネコ、ネコよりも小鳥のほうが世話が楽だし、マンションなどでの飼育も許容されるということも背景にあります。動画サイトなどで可愛らしいしぐさを見て買いに来る若者、高齢の親にプレゼントしたいという娘さんなど客層も幅広いのが特徴です」（米山さん）

小鳥の中でも特に人気が出ているのがインコ類だという。

大型のインコだと30万円以上するが、知能もすぐれ言葉も覚えるなど人気があるという。インコはキビやヒエなど餌のにおいがすると言われるがそうした雑穀とバニラ味をブレンドした『インコアイス』が百貨店のイベント等で売り出されたり、インコをデザインした雑貨や文具なども若い女性に人気が出るなど『インコ市場』が活性化している。

実は生体の販売価格にも特徴がある。

「イヌやネコは生後51日以上で販売を開始しますが、月齢が経つと価格は下がる傾向にあります。ところが小鳥の場合仕入れてからある程度時間が経つと慣れてきて、手乗りなどができるようになります。当社では販売価格を上げていきますが、慣れた小鳥ほど人気が出ます」（米山さん）

近年ペット業界は高齢者世帯の増加に伴い、右肩上がりの市場で推移してきた。子育てが終わり生活に余裕のある人が増えたことは追い風だった。しかし更に高齢時代になると、散歩の必要なイヌが敬遠されたり、飼い主が先に他界した後ペットがかわいそうだと、新たなペットを飼うことを敬遠したりという傾向も出始めている。

「その点、小鳥は気軽に飼えることと、話しかけることで認知症予防に効果があるなど今後のペット市場で大きな役割を果たすと思います。保険の整備、また飼い主不在時に利用できる鳥ホテルの展開とともに、当社独自の品質の良い小鳥

の生体の新たな取扱い先ルートの開拓を進めています」  
米山さんはこう語り、小鳥市場が大きく羽ばたくことに期待を示した。

高齢化が進むと、市場拡大が期待されるものに補聴器がある。  
平均寿命が延びたことは嬉しい限りだが、人生の後半に目や耳の能力が衰えて  
しまうことはどうしても避けられない。老眼鏡や補聴器のお世話になる人の数  
は増える傾向にある。

「当社では92年に軽度の難聴用の補聴器市場に参入し、これまで合わせて130  
万個を販売してきました。今後この市場はさらに伸びると思います」  
こう語るのはオムロンヘルスケア国内事業部の高桑暢浩さんだ。

国内の補聴器の出荷個数は2015年度56万個で5年前と比べて20%程度増えている  
が、実は日本では難聴と自己申告している人のおよそ14%しか補聴器を使用し  
ていないという。これはイギリスの41%、ドイツの34%、アメリカの24%などと  
比べてかなり低い普及率にとどまっている。

これには私にも思い当たる節がある。

私の祖母も母も老境に入り会話が聞き取りにくく、補聴器をプレゼントするから  
装着してほしいと再三薦めたが「いやだよ、年寄りくさくみえるから」とな  
かなか応じようとしなかった。

「たしかにシニアグラス（老眼鏡）ほどは普及していないのはそういう認識が  
障害になっているのかもしれませんが。PCや会議資料を見るために、ピンポイン  
トでシニアグラスをかけるという方が多いように、会議や商談などで大事な要  
点を聞き漏らさないように補聴器を使うといったシーン提案をすることでイメ  
ージを変えていかなければなりません」（高桑さん）

オムロンヘルスケアでは、最近イヤメイトシリーズ3機種のうち2種をリニュー  
ーアルした。耳穴に装着するタイプは本体の重さがおよそ1.8gと超小型で見た  
目も目立たない。

「軽度難聴用の補聴器は、これまであまり知られていませんでしたが、通販市場  
で販売したところ売り上げを伸ばしつつあります。今後はこれまで中度・重度の  
補聴器を主に販売してきたメガネ店やテレビ通販などでの販売にも力を入れ、  
補聴器をもっと気軽に使っていただけるように紹介していきたいと思います」  
高桑さんはこう語る。

難聴は認知症につながる危険性も指摘されているだけに、今後軽度の補聴器市  
場はさらに拡大しそうだ。

人口減少に加え急速な高齢社会の進展で東京オリンピック以降の日本経済は、長いトンネルに入ることが予想される。

昭和 39 年のオリンピック以後も 40 年不況があり、政府は戦後初めて国債を発行するなどして景気対策に務めた。

比較的短期間で不況を脱することができたのは当時社会人になり、結婚適齢期に入りつつあった戦後のベビーブーム世代が 3C と呼ばれた「カー、クーラー、カラーテレビ」の購買層になり景気拡大をけん引したことが大きな要因だった。その時の経済のエンジン役だったこの世代が今度のオリンピック以降は後期高齢者入りして消費のけん引役どころかブレーキになりかねない心配がある。

企業に求められるのは自社にあった高齢時代向けの提案力だ。

今回紹介した三社は、その共通の事例と言えそうだ。

## ★レオン

スペイン・カスティーリャ・イ・レオン州レオン県のムニシピオ（基礎自治体）。レオン県の県都である。2012 年の自治体人口は 131,680 人であり、レオン

都市圏の人口は 204,212 人。 □ 中世にはレオン王国の首都が置かれていた

ため、有名なゴシック様式のレオン大聖堂やその他多くの記念建造物がある。サン・イシドロ聖堂は、かつてのレオン王国歴代国王や王家の人々が埋葬された霊廟であり、ロマネスク様式の絵画を多く収めている。市内にあるカサ・デ・ボティーネスは、建築家アントニオ・ガウディが初期に設計したもので、現在は銀行が入っている。かつてサンティアゴ騎士団の本拠として 16 世紀に建設されたサン・マルコス修道院は、現在パドールとレオン美術館として利用されている。

レオンは、復活祭のようなフィエスタで知られている。レオン市民による礼拝行進は国内外から観光客を集める有名な伝統行事となっている。レオンは紀元前 1 世紀、ローマ軍団第 6 軍団ウィクトリクスによって建設された。68 年、第 7 軍団ゲミナが恒久的な軍事キャンプを創設し、これが市の原型となった。ローマ軍団は、ローマ皇帝ガルバによりイベリア人から補充され<sup>1</sup>、彼らは市の場所を、アストゥリアスやカンタブリアの山岳民族から領土を守るための要地とした。そして域内の、特にラス・メドゥラスで採掘される金の輸送を取り締まっていた。タキトスは旧第 7 軍団クラウディアと区別して軍団をガルビアナと呼んだが、この名称は裏付けられるどの碑文からも確認されていない。ゲミ



ナの名称があったことはわかっている。ゲルマン人軍団の一つを指揮した<sup>1</sup>ウェスパシアヌスによって合併されたため、第1軍団ゲルマニカになったとはありえない。軍団の正式名は、第7軍団ゲミナ・フェリクスであった。パンノニアで任務に就いた後、内戦時にヒスパニア・タラコネンシスでウェスパシアヌスによって駐留させられた。元々この地域にいた軍団3つのうちの2つ、第6軍団ウィクトリクスと第10軍団ゲミナの場所を提供されたが、この2つはゲルマニアへ退却していった。後の皇帝たちの支配下でこの定期的なレオンの冬期宿舎は、プトレマイオスの旅行日記や幾つかの碑文から我々は知ることができる。ローマ以後のレオンは、レオン王国の歴史が占める。アストゥリアス地方にあったローマ軍団の基地は、重要な都市に成長し、586年まで西ゴート族の攻撃に抵抗し続けた。586年、ついに西ゴート王リウヴィギルド(en)に征服されたのである。レオンは、西ゴート王国が要塞の維持を許した数少ない都市の一つだった。イスラム勢力との抗争時代、ローマ人が山岳民族の侵入から平野を守るために建設した要塞は、スペイン独立の最後の避難所として、山地を覆った進化した地位になった。

846年間近には、モサラベの集団が市に再び植民しようとしたが、イスラム勢力の攻撃で主導権が妨げられた。856年、キリスト教徒のアストゥリアス王オールドニョ1世の再植民の試みがなされ成功した。オールドニョ2世はレオンをレオン王国の首都とし(914年)、イベリア半島のキリスト教徒都市で最重要の地となった。987年頃イスラムの将軍による略奪に遭い、市はレオン王アルフォンソ5世によって再建され、彼は市場の機能を含む経済活動を取り締まる1017年法令を出した。レオンはサンティアゴ・デ・コンポステーラへ向かう巡礼路の拠点の一つであった。貿易商人と職人のための郊外が13世紀以降ふくらみ、自治対政府の影響を受け始めた。中世初期、家畜の飼育が市繁栄の時代を築いた。

16世紀、経済と民主主義の衰退が固定され、その状態は19世紀まで続いた。1936年7月、スペイン内戦時、レオンは共和主義者に対する闘争に参加した。

1983年、レオンは近隣のカスティーリャ地方と合併し、新設されたカスティーリャ・イ・レオン州に含まれることになった。少数の住民と地元政治運動は、カスティーリャに支配されることに反対した。結果として、レオンは人口の少ない、レオン自治のための穏健な政治運動の中心となった。一部のレオン住民は、サラマンカ県、レオン県、サモラ県(いずれもレオン地方を構成していた)各県からなるレオン州の創設構想を支持した。

## ●レオン大聖堂

古典的なフランス・ゴシック様式のより洗練された様相を持つ。サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路途上に位置する。ブルゴス大聖堂に次ぐ、スペイン・ゴシック様式の優れた例である。レオン大聖堂は、グラス・ストーンに置き換えるため壁を最小限に減らし、世界最大級のステンドグラスのコレクションを有する、ゴシック様式の脱物質化の終わりを導いた存在として知られている。ロマネスク様式時代の構造物も、翼廊のアーチなど一部が残っている。最初、大聖堂の位置にはローマ軍団・第7軍団ゲミナ (Legio VII Gemina) の、現在の大聖堂よりも大規模な浴場があった。19世紀の大規模な大聖堂修復事業中に、遺構が発見されている。1997年には南側ファサード沿いに別の発掘作業が行われた。

イベリア半島でキリスト教徒によるレコンキスタが行われていた時代、浴場は王宮に変えられていた。レオン王位につく数ヶ月前にレオンを占領していたオルドーニョ2世は、サン・エステバン・デ・ゴルマスの戦いでアラブ人を破った。勝利に対する神への感謝の印として、最初の大聖堂建設のため王の王宮が捧げられた。司教フルミニオ2世指揮のもと、建物は神聖な場所に生まれ変わった。924年にオルドーニョ2世が亡くなると、レオン大聖堂に埋葬された。大聖堂はベネディクト会派の聖職者たちによって維持されていた。このことは、レオン王国内のモサラベたち多く存在していたものと似た構造であった。

10世紀後半、都市を荒廃させ教会を破壊したアルマンソルの通過を語らねばならない。しかし大聖堂の損傷は少なく、999年にアルフォンソ5世の輝かしい戴冠式が行われている。政治的混乱と党派に分かれた軍力による争いから、1067年の大聖堂は極端な窮状にあった。フェルナンド1世は聖イシドロの聖遺物をレオンに移すと、一転して大聖堂に好意を示した。フェルナンド1世はキリスト教王国の国土を広げて平和な時代をもたらし、この時代にロマネスク様式美術が開花した。

王はナバーラ王女テレサ・ウラカの助けを借りて、ローマのキリスト教の願いに応える第2の大聖堂建設に着手した。それは司教ペラーヨ2世が指揮した。この大聖堂の様式は本質的に、レンガや石材が使われ、後陣には3つの半円のついた、旧教会と同じく聖母マリアに捧げられたロマネスク様式だった。それは1073年11月10日、アルフォンソ6世の時代に献堂された。

この大聖堂は12世紀まで存在した。最後のレオン王であるアルフォンソ9世が即位すると、社会は変革がおき、美術は新たな創造と発展を迎えることになる。

1205年頃、第3の大聖堂建設が始まった。しかし基礎工事の建設問題で工事は進まず、1255年まで膠着したままだった。司教マルティン・フェルナンデスとアルフォンソ10世の後援のもとで工事が再開された。大聖堂の主任建築家は、おそらくフランス生まれのエンリケ親方で、かつてブルゴス大聖堂建設に関わっていた。それは、彼がイル＝ド＝フランスにおけるゴシック様式のかたちを知っていたことから明らかである。エンリケ親方が1277年に亡くなると、スペイン人フアン・ペレスが後任となった。大聖堂が礼拝のために既に信徒に開かれていた1289年には、司教フェルナンデスも死んだ。大聖堂の基礎工事は終了し、1302年に司教ゴンサロ・オソリオは忠実に大聖堂全体の門戸を開いた。しかし南側の塔が最終的に完成したのは15世紀だった。

ブルゴス大聖堂の姉妹のようなレオン大聖堂は、エンリケ親方が知っていたかもしれないランス大聖堂の構造に似ている。ほとんどのフランスの大聖堂のように、レオン大聖堂は幾何学的なモジュールに沿った三角形のかたちが基礎となっており、全ては平方根の3に関連する。

## ●バスクとは？

スペイン・イベリア半島最北端のピレネー山脈西方にアラバ、ギプスコア、ビスカヤの三県からなるバスク地方がある。バスクという呼称は、ローマ人の命名したバスコニアに由来するが、バスク人たちは自らを「バスク語を話す人々 [エウスカルドゥナク (Euskaldunak)]」と称し、その地をエウスカディ (Euskadai または Euzkadi) と呼んでいる。この呼称は、19世紀後半に始まる民族運動の中で登場した。但し、総称としてのバスク地方となると、スペイン側のバスク三県にナバラ県を加えた四県と、フランス側のラプルディ、スベロア、ナファロア、ベエレアの三県の合計七県を指すことになる。バスクから世界に広まった黒いベレー帽 (ボイナ) をかぶり、難解といわれる起源不明のバスク語 (エウスカル) を守り続けている彼らは、自らの生活習慣・信条を何等変えることなく、山岳・丘陵地帯を離れずに質素な生活を何千年と続けてきた。また、工業面に関しては、バスク地方は昔から石炭・鉄鉱石・石灰石の豊富な所として知られているが、この鉱物資源と19世紀の工業重視政策が融合して、スペイン第一の工業地帯となっている。

バスク人の起源は、歴史的には、インド・ヨーロッパ語族のヨーロッパ到来以前からピレネー山麓で生活していた、狩猟民族ではないかという説が最も有力である。身体的特徴としては、顔の骨格は狭く、こめかみの辺りが張っており、頭は前後に長く、顎や鼻は尖っている。腰部は狭く、肩幅は広い。平均身長は160センチから170センチである。血液型はヨーロッパ人に多いA型は少なくO型が圧倒的に多い。しかもRhマイナス型が多い。

ところで、1990年から91年にかけての旧東ヨーロッパ諸国の民主化、旧ソ連邦の崩壊、バルト三国、スロベニア、クロアチアの相次ぐ独立を受けて、この小さなバスク地方においてもラジカル民族主義者を中心に、スペイン政府に対して「民族自決権 (Autodeterminatzeko esku-bidea)」と求める大規模な決起集会やデモが行われるようになった。特に1959年以降30年以上も武装闘争を展開しているテロ組織「バスク祖国と自由 (ETA)」による過激な分離・独立運動が激しさを増している。

## ●バスクのイメージを悪化させたテロ集団

民族優位性は、最悪の形をとって現れることになった。それがETA (Euskadi Ta Askatasuna・バスク祖国と自由) である。

ETAは、スペインのフランコ独裁政権による抑圧に反発し、1959年に結成された。

スペインやフランスによって分割支配されているバスク人居住地域を一つの独立国家として分離させることを目標としており、度重なるテロ活動を行ってきた。1973年には、フランコ政府の首相カレロ・ブランコを暗殺した。

そのため、バスクといえば、テロ集団であるETAのイメージが強くなった。

バスクは、現在の地名で言えば、スペインのバスク州のビスカヤ県、ギプスコア県(ここにサン・セバスチャンが位置する)、アラバ県と、ナバラ州やフランス南西部のピレネー=アトランティック県に位置するフランス領バスクのラブール、スール、バス=ナヴァールが含まれ、国境を超えた動きになっている。

ETAによるテロの犠牲者は毎年50人くらい、多いときには100人近くになることもあった。テロは近年になっても続き、休戦協定を結んでいた1999年以外は毎年多くの犠牲者を出しつづけた。ETAによるテロの犠牲者はこれまでに800人以上に上る。

しかし、2011年10月20日、ETAは、40年以上に及ぶ武装闘争の終結を宣言。バスク地方の地元紙ガラ(Gara)のウェブサイトに掲載された動画

で、黒服に白いマスク、ベレー帽（バスク発祥の帽子です）姿の ETA 戦闘員 3 人が武装闘争の完全終結を宣言した。

スペイン政府は、民主主義の歴史的な勝利だと、宣言を歓迎し、そのニュースは世界中をめぐった。

この終結宣言は、バスク人にとっても喜ばしいことだ。バスクの多くの人たちは、独立心はいまでもあるが、無差別テロを繰り返す ETA を、バスクの恥だと思っていたからだ。

## ★第5日 8月29日(水)

### ●世界中から注目を集めた「ビルバオ・モデル」とサン・セバスチャン

そのバスク州の中心的都市であるビルバオ。いまでも州人口の大半は、このビルバオに集中している。かつて、ビルバオはとても裕福で先進的な都市だった。それは、19世紀にビルバオ周辺で豊かな鉄鉱石が発見されたためで、19世紀から20世紀半ばにかけて、ビルバオはバスクの「産業革命」の中心となった。

鉄鋼業や造船業に加えて金融業も発達し、20世紀のはじめにはスペインでもっとも裕福な都市の一つとなった。しかし、アメリカの成長や1970～80年代かけての経済危機もあって、こうした産業に陰りが見えはじめると、新たにサービス産業が発展。

特に90年代後半からはじまった「クリエイティブ・シティ」観光戦略は大成功を収め、いまは、都市再生にもっとも成功した欧州の都市として、その再生手法は世界各地で「ビルバオ・モデル」と呼ばれている。

クリエイティブ・シティ（創造都市）とは、チャールズ・ランドリーらによって提唱されてきたもので、「芸術や文化及びクリエイティブ・インダストリーとまちづくりの一体化を志向する新しい都市創造の概念」のことだ。

ヨーロッパでは1990年代から都市論や都市経済学などの分野で、こうしたクリエイティブ・シティの議論が盛んになってきた。

グローバル化による経済空洞化や高齢化による人口減少など、現代における先進国の都市が抱える問題を解決するためには、自由な市民の創造活動によって芸術や文化を育み、その創造性に基づいて革新的な産業の発展を起こすことが必要であるという考え方である。

ユネスコが、創造的・文化的な産業の育成、強化によって、都市の活性化を目指す世界の各都市に対し、文化の多様性の保護のための国際的な連携・相互交流を支援する「クリエイティブ・シティズ・ネットワーク」を2004年に設立するなど、都市計画における世界的な潮流となっている。日本からは、金沢市や名古屋市などがこのネットワークに加盟認定されている。

スペインでは、ビルバオの他にもバルセロナがこの「クリエイティブ・シティ」の例とされており、世界一の観光先進国スペインの成功は、地域ごとによるこのクリエイティブ・シティ=創造都市戦略が大きい。

## ★第6日 8月30日(木)

● 同じバスク自治州に所属する三つの県の県都という共通点があるとはいえ、スペイン北部屈指の工業都市として発展したビルバオと、中堅の港湾都市であるサン・セバスチャンでは規模が大きく異なる。

サン・セバスチャンにビルバオと同じほどの財政力や予算の割り当てを期待することはできない。観光振興のためには、やはりそれなりの「予算」や「売り」がなければ、できることにも限界がでてくる。それでは、なかなか観光客を増やすことはできない。

サン・セバスチャンの人口は、大成功した観光都市バルセロナの10分の1しかなく、また、ビルバオの半分ほどだ。

バルセロナやビルバオのようなそれなりに大きな都市では、ビルバオ・グッゲンハイム美術館のような大型プロジェクトに投資ができるが、サン・セバスチャンは人口わずか18万人の都市であり、困ったことにビルバオから一時間で来られる「半端」な距離でもある。

なにもかもが「半端」なサン・セバスチャンは、90年代のビルバオの大躍進に歯がゆい思いをしていた。なにしろ、ここには世界遺産もないどころか、太陽が「売り」のスペイン観光において、スペインでもっとも降雨量の多い街だからだ。

サン・セバスチャンの年間降雨量は1400ミリを超える。これは東京とほぼ同じだ。中でもスペインへの観光客が多い秋のハイシーズンである10月から11月が、年間でもっとも雨が降る。

そこで、この雨が多い地域を逆手にとって、最近「グリーン・スペイン (España Verde)」と名付けた観光キャンペーンを展開している。イベリア半島最西端に位置するガリシア州から東に向かって、アストゥリアス州、カンタブリア州、バスク州の四つの州がこの名前と呼ばれ、あたらしい地域スローガンとして観光キャンペーンに使用されている。

この地域は、年間を通して降雨量が多いため、一般的な「灼熱の太陽の国スペイン」とは、まったく異なった地域だ。

### ●かつての高級保養地がいまは美食の街

サン・セバスチャンは、その名のとおり聖セバスチャンがこの地に埋葬されたことに由来し、毎年1月20日の聖セバスチャンの祭日には「タンボラーダ」と

呼ばれる祭りが行われており、街がもっとも賑わう。

これはコックや兵士の衣装を着た人々が太鼓をたたきながら、24時間ずっと街中を練り歩くというもので、ナポレオン戦争でフランスに占領されていたこの街のコックが、太鼓をたたいて行進するナポレオン軍を馬鹿にして真似をしたのが始まりとされている。

スペイン北部、大西洋（ビスケー湾）に面したこの街の歴史は、港湾都市として発達すると同時に、美しい海岸線などによってかつては高級保養地として知られ、多くの王族などが訪れ、ヨーロッパの貴族たちに街の名前が知れ渡っていた。この豪邸の数々は、いまも残っており、いくつかの名所は市民の憩いの場所として広く開放されている。

また、現在では、バスク地方の中心都市の一つとして、国際映画祭や国際音楽祭も開催されるようになってきている。スペインにしては雨が多いということを除けば、非常に暮らしやすい街だ。

しかし、この地に住む一般市民の暮らしは、かつては決して豊かなものではなかった。サン・セバスチャンから80キロほど西にある、バスク自治州最大の都市ビルバオが、産業革命の恩恵を受けて繁栄していたときも、この街の人々は、目立つことなく慎ましく暮らしていた。これが、約10年前まで続いた。

## ●サン・セバスチャンの名物「ピンチョス」とは？

バスク地方の特色として「教えることに惜しむということをしていない」という理由から、多くのレストランそのものが学校の役割をしているとも言える。

このような街中に溢れるオープンな姿勢、良い教育が幸いして、この地の料理のレベルは、全体的に高くなった。なかでも皆で教えあうことで、一気に料理の質があがったのが、バルで出される小さな料理ピンチョス（単数形はピンチョ）である。

当初はバゲットパンを土台にして玉子焼きや、肉や、魚類を載せて落ちないように楊枝で刺したつまみを一般的にピンチョスと呼んでいたのが、楊枝が使



われていないものや小皿料理まで最近ではピンチョスと総称するようになっている。

バスク地方はその食の伝統を大切にしてきた地方で、その多様性と質の高さで知られている。レストランやバルはその楽しみの場所であり、食べたり飲んだりするだけではなく、そこは友人たちと談笑する重要な場所ともなっている。小皿料理は、立ちながら談笑して、少し食べるのに向いている。

ピンチョスとはそもそも「串」の意味であり、おつまみのことをこう呼ぶのはバスクの文化圏だけで、その他の地方ではつまみのことはタパス（単数形はタパ）と呼ばれる。タパとは蓋という意味で、かつてハエなどが多かったスペインで虫が入らないようにワインやビールのコップの上に小皿を置いて蓋をし、その上にちょっとしたつまみを置いたことからこう呼ぶようになった。

バスクの代表的なピンチョスは、「ヒルダ」と呼ばれるオリーブとアンチョビや酢漬けの青唐辛子が一緒に楊枝に刺さったものだ。

ピンチョスは日本で言えば鮎にたとえることができるかもしれない。鮎はかつて高級料理ではなく、ちょっとしたおつまみのような小皿料理であった

## ● 「ヌエバ・コッシーナ」とは？

この小さな街に、ミシュランの三ツ星レストランが三店、二ツ星レストランが二店、一つ星レストランが四店もある。人口一人あたりのミシュランの星の数は、ダントツの世界一で、しかも、世界の飲食業関係者の投票による英国「レストラン」誌「世界のベストレストラン50」のトップ10に、この小さな街から二つのレストランが入った。

このサン・セバスチャンが、世界に誇る美食の街となったのは、わずかここ10年ちょっとの話。主立った産業もなく、観光の目玉になるような世界遺産や美術館もないこの街は、集客の目玉として「美食」に焦点をあてた。元々、海の幸も山の幸も豊富な場所だったが、そのような素材をただ使っただけの料理では、他の街と争うことはできない。そこで90年代にはじまったのが「ヌエバ・コッシーナ」と呼ばれる食の運動だった。

「ヌエバ・コッシーナ」は、直訳すれば「あたらしい食」である。当時、この地の若いシェフたちは、いままでにはなかった、類を見ないあたらしい料理を作ろうと考えた。

それは、徒弟制度で形成されていた既存の料理業界へのアンチテーゼからはじまった。彼らは、レシピを口外しないフランス料理に代表される古

典的システムとは対照的に、あたらしい技法やレシピをお互いに教えあい、また、

伝統に囚われず、旅をして見つけてきた世界中の食材や調理方法を取り入れ、見たこともない料理を次々と作り上げることに成功した。

そして、お互い教えあいながら、さらにレシピを共有する「料理のオープンソース化」が幸いして、この地のレストランのレベルがいっせいに上がりはじめた。

★スペイン名物のパエリアやリゾットも、すべてミニチュアサイズにして出すアイデアを街中で「シェア」し、いまやミニチュア料理は、この街の名物になった。こんな料理がある街は、世界広しと言えど、サン・セバスチャンだけだ。そして、このようなあたらしい料理を目指して、わずか人口18万人のサン・セバスチャンには、今日も世界中から観光客が集まる。

製造業だけでは世界に勝てなくなった日本は、今後早急に「観光先進国」としてやっていく必要がある。日本にも豊かな食材がある地域はたくさんある。日本の小さな地方都市が、世界から観光客を呼び寄せる可能性のヒントは、どうやらこのサン・セバスチャンにありそうだ。

## ● 「欧州文化首都」としてさらなる飛躍へ

サン・セバスチャンは、2016年の「欧州文化首都」に決定したと発表された。

欧州文化首都（European Capital of Culture）とは、EUのなかから毎年一つ（最近は複数の年もある）の都市を選定し、一年間、さまざまな芸術・文化的な行事を催すというものだ。

当初は純粋な文化的側面だけだったが、現在では観光客誘致効果が非常に大きいことから、経済的な政策としても注目を集めている。その結果、各都市間では我こそ候補地に、と競い合いが起きている。

1985年のアテネから始まり、ベルリンやパリ、マドリードなど名だたる都市が選ばれていたが、こうした経済効果を見越して、最近では少し小さめの都市へと主たる対象が移ってきている。

いずれにしても、この欧州文化首都に、これまでも述べてきたように大した観光資源もない、人口わずか18万人の小都市サン・セバスチャンが選ばれたのは、この街が美食文化の街としてついに世界的に認められたといっても過言ではない。

★第7日 8月31日（金）

●バルセロナ

スペインには地方ごとに「国」があるといわれるが、ここバルセロナを州都とするカタルーニャ地方もまた、独自の歴史と文化を育んできた。イスラム教徒がイベリア半島の大半を支配していた9世紀、カタルーニャはフランク国王の版図に組み入れられ、986年にはバルセロナ伯国として独立を宣言。これが現在のカタルーニャの起源である。中世ヨーロッパの影響を受けながら、またイスラムの進んだ文化を取り入れたカタルーニャは、勢力を地中海に拡大し、約4世紀にわたる黄金時代を迎えた。

しかしその後のスペイン統一により衰退、1714年にはスペイン継承戦争の敗北を機に自治権を失ってしまう。再び発展が始まったのは19世紀半ばのこと。カタルーニャ・ルネッサンスと呼ばれるこの時代、モデルニスモという芸術運動が起こり、ガウディをはじめとする建築家たちの作品が街並みに彩りを添えた。

フランコ死後の1977年に念願の自治権を獲得したカタルーニャは、フランコ時代に禁止されていたカタルーニャ語を公用語として復活させた。今では街なかにかタルーニャ語の標識が掲げられ、カタルーニャ語で会話を楽しむ人々の姿が見られる。昔から自由で新しい文化を取り入れ、数多くの芸術家たちを生み出したバルセロナは、21世紀に入りいっそう、スペインで最も活気のある都市として躍進を続けている。

●スペインでは、自治が各地方によって大きく認められている。

1978年の憲法改正によって、中央集権から地方分権へ移行し、政治権力と諸機能が自治州に委譲され、地域整備や都市計画の権限も地方に委ねられるようになった。観光戦略を練るにも、スペイン政府が直接関与するのではなく、各州が主体となって、市町村をたばねている。長い間、王政だったスペインは、1930年代の市民戦争を経て、フランコ将軍の圧政が1975年まで続く。

市民戦争はスペイン内戦とも呼ばれ、マヌエル・アサーニャ率いる左派の人民戦線政府が総選挙で勝利したことをきっかけに、政権を追われたフランシスコ・フランコ（フランコ将軍）を中心とした右派の反乱軍との争いがスペイン全土に広がった。内戦は、1936年7月から1939年3月まで続いた。

フランコ軍をドイツ、イタリアが、人民戦線をソ連がそれぞれ支持し、ファシズム対反ファシズムという、その後の第二次世界大戦を予見する戦いとなった。

しかし、勝利を収めたフランコ将軍は第二次世界大戦に参戦することはない、スペインは他のヨーロッパ諸国とは別の道を進むことになる。それは、事実上の鎖国で中央集権化だった。

当時のフランコ政権は、サン・セバスチャンを有するバスク地方やバルセロナがあるカタルーニャ地方の独自文化を一切認めず、すべて中央政府がコントロールする形で（圧政を敷く形で）、官僚主義として画一的な国家運営を長い間続け、国は疲弊した。

その後、1975年11月にフランコ将軍が没すると、スペインに立憲君主制の時代が訪れる。王政でもなく官僚主導でもない市民のための開かれた国として、あたらしいスペインの歴史の幕開けとなる。

このとき、本当のグローバル化がはじまった。まずは、輸入禁止されていた文化が隣国フランスから続々とやってきた。まるで、時間軸を飛び越えるようにハードロックとヘヴィメタルが同時に渡西するようなことが起きた。

そしてさらに、フランスからやってきた「食の革命」と言われるヌーベル・キュイジーヌが、フランスと隣接していたサン・セバスチャンに訪れた。ここから、サン・セバスチャンの食の都としての歴史がはじまることになる。

サン・セバスチャンでは、日常的に話していたバスク語が禁止され、バルセロナではカタルーニャ語が禁止されていた時代から、すべて解禁されることになった。

スペインのサッカー、特にクラシコ戦と呼ばれるレアル・マドリード対FCバルセロナがいまだに大事な試合だと言われるのは、圧政時代に禁止されていたカタルーニャ語を話せるのが唯一サッカー場の「キャンプノウ」スタジアムだけであり、その両者の試合は、まさに帝国軍と反乱軍の様相だったからだ。

そのような圧政の反動もあり、スペインは公用語として、スペイン語とその地域の言葉の両方があって、交通看板から市役所の書類まで、すべて二つの言語で書かれており、僕が見る限りほとんどの地域では、その地域の言葉が、まずはじめに書かれている。このあたりから、地域言語を大事にしていることがよくわかる。

## ★第8日 9月1日（土） まとめ

### ●外国人観光客が、国の人口を超えたスペイン

世界有数の観光先進国となったスペイン。訪れる外国人の数は、フランス、アメリカについて世界第三位。

2001年時点の統計で、スペインを訪れた観光客4800万人は、国の人口4000万人をはるかに超えており、現在も伸びている。国際観光収支世界第一位であり、観光GDPで見ると、スペインは日本の50倍も観光産業が発達している。

スペインは1970年には観光省を作った。当時はフランコ将軍圧政時代で、ほぼ鎖国状態であったため、外貨を稼ぐために観光産業は絶対に必要な産業だった。

ペット同伴旅行者を呼び込んだ南スペインの発展

また、旅行と言えれば問題となるのが犬や猫などのペットをどうするかだ。

この点についても、EUに統合されたことで、ペットを連れての旅行が非常にしやすくなった。

現在、EUには「ペットパスポート」がある。

これは、2004年からEU加盟諸国で導入された、ペットパスポート・イニシアティブ（Pet Passport Initiative）という動きにより設けられた。

動物の検疫システムは国ごとに異なるため、犬や猫などを連れていくと、空港などで煩雑な手続きがあり、時間もかかった。それを改善するために創られたのが「ペットパスポート」だ。一定の条件を満たせば、六カ月ほどかかる検疫を、書類審査のみで通過できるようになった。

「ペットパスポート」は名前のおおりの、人のパスポートと同じ役目を果たすもので、ペットの名前や特徴、写真、飼い主の情報などが記載されている。

ただ、このパスポートを取得するには、日本ではあまり馴染みのない動物個体認証のマイクロチップをペットの体に埋め込むことが必須で、パスポートにそのIDが記載される。このマイクロチップは動物病院で主に首の後ろに埋め込んでもらうもので、狂犬病予防接種の履歴など必要情報が記録される。

EUではペットを連れての旅行も気軽にできるようになっており、それが旅行

者の増加に一役買っている。長期滞在者が多い南スペインの空港では、ペット同伴の旅行者（大抵は富裕層）を数多く見かける。

それによって、何も主立った産業がなかった南スペインには、多くの外国人向けの保養地が発展した。

## ●全国からお客が殺到するレストラン「アル・ケッチャーノ」

山形県鶴岡市。

駅前には日中でも人の気配がない典型的な地方都市。

しかし、ここ鶴岡市の「アル・ケッチャーノ」だけは、全国から予約が殺到する人気レストランだ。

イタリアンを謳っているが、料理はイタリアンを基調とするまさに「庄内地料理」とでもいおうか。

「アル・ケッチャーノ」の奥田シェフは、「食」を通して地域活性化を考えた。まず手を付けたのは、在来野菜の復活。

現在日本に普及している野菜は、全国流通に耐えうる画一的な品種が主流。しかし、日本には、地域に根差した「在来野菜」というものが昔から多数あった。在来野菜は全国流通にむかないため、作り手がみるみる減少していた。奥田シェフは、庄内平野が育んできた在来野菜に目をつけ、在来野菜を細々と造り続けている農家を一軒一軒回り、自分のところで買い上げるので、生産を続けてくれと懇願。

こうして、まず、野菜で特徴を出した。庄内でしか食べられないイタリアン。日本中、どこへ行っても他では絶対に食べられない料理だ。「差別化」。これがなにをやるにもキーワード。

続いて、畜産農家からワイン醸造者までめぐり、すべてを庄内産でそろえた。

奥田シェフの料理には、「月山」をテーマにしたもの、庄内の海でとれた新鮮な魚など

オリジナリティがある。

「アル・ケッチャーノ」の存在により、庄内の農家は息を吹き返した。評判が評判を呼び、今では、この在来野菜は全国から注文がくるようになった。

そして、庄内全体が元気になった。

## ★最後に

日本は工業国家として明治維新後先進国に駆けあがった。

しかし発展途上国の追い上げと先端技術の拡散、更には国内市場の高齢化人口急減による縮小も考えるとこれまでにないビジネスモデルを構築するしか未来図は描けない。

2020年のオリンピックを日本新戦略の起点として考えるべきだ。

政府は2020年の観光客数を4000万人と見込む。

人口1億2000万人の3分の1だ。

世界の観光大国フランスは人口8000万人で観光客8000万人。スペインは4000万人に対して4800万人とほぼ拮抗する。

他の産業が乏しいスペインの観光産業が占める割合は日本の50倍である。

日本は四季があり、文化伝統にオリジナリティがあることから観光の潜在力は多いに期待できる。

そして世界は今第二次世界旅行ブームだ。

ジャンボジェットの就航によるパック旅行登場が第一次ならば、いまはLCCの就航により、経済発展目覚ましい国々からの新規海外旅客が誘引できる。そしてその潜在マーケットは日本に近いアジアの国々ではないか。

戦争でも起こらない限りオリンピックの年の海外観光客数はその後も増え続け、将来は人口に匹敵する人数が大挙押し寄せてくるだろう。

ホテルやテーマパークといった狭義の観光産業への恩恵と捉えるべきではない。

彼らは日本生きて日本人の暮らしを見聞し、それを本国に帰ったからもひろめるだろう。

もともとは日本人のために作った日本オリジナル商品の輸出のチャンスが広がる。

和食懐石料理、うどん屋、お好み焼き屋、せんべいに饅頭、日本酒にダシに醤油、みそといった食にまつわるビジネスは一気に海外進出のチャンスが広まるだろう。

温水洗浄便座に、軽自動車。マッサージチェアに畳に寝ゴザ、伝統工芸家具や茶わんなどの陶磁器まですそ野は広い。

また温泉文化や合掌づくりの民宿なども人気だ。

第二次旅行ブームが始まったころは銀座など都心での爆買いが話題になった。

これはかつて日本人が初めて海外に出かけたころを考えればよく理解できる。



最初は団体の「旗振りツアー」で出かけ、シャンゼリゼや五番街やオックスフォードストリートで「バスが来るまで1時間買い物タイム」で慌ててブランド品を買い込んだものだ。

「初めての海外旅行楽しかったな、でも今度来るときはフリータイムの多いツアーにして自由に買い物や見学を楽しみたい」と思わなかったか。

今後日本ではこういう外国人観光が増えてゆく。

東京や京都だけではなく、日本の隅々の自然や風土を楽しもうとする人たちが増えればどれだけ地域再生に役立つだろう。交通不便な所でもクルーズ船が入港してくれれば大きな消費を産むはずだ。実際函館や長崎、境港や小樽、下田といった港町は外国人クルーズ客の人気立ち寄り港になっている。

ポルトガルやスペインはいわば「老大国の先進国」だ。

工業生産は必ずしも得意ではないが、郷土料理やワインで魅力を発信し、そして世界遺産が最大の観光資源である。

かつて発展したレガシーを売り物に全世界から観光客を集めている。

工業が廃れた後グッゲンハイム美術館を核に再生を図ったビルバオ一次製品の生産地にミシュランレストランというブランド付加価値で魅力ある街を作ったサンセバスチャン。そこで供されるピンチョス料理は少しでもたくさん多くのモノを食してもらおうという日本の寿司に近いものがある。あるいは宇都宮の多くの餃子店を食べ歩いてもらおうという「一皿ミニ餃子」とも近い。

何もなくても知恵がある。

何もしなければ不況だ。

誰かが何かを始めなければ何も始まらない。

今回のツアーがそんなやる気を引き起こすきっかけになればこれほど嬉しいことはない。

バルセロナ発 帰国便 機中にて

西村 晃